

研究業績等に関する事項

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書(和文))				
1.	成蹊人文叢書10『シェイクスピアを教える』	共著	2013年3月 成蹊大学出版会(成蹊大学文学部編) 290頁	「歴史劇の可能性を求めてー『ヘンリー六世』第二部における庶民についてー」29-64頁(エマ・ファイアストーン、真部多真記、高野秀園、佐野昭子、正岡和恵、石原直美) 概要: シェイクスピアの英国史劇はチューダー王朝にいたるまでの王朝物語を描き、庶民や女性に焦点があたることはほとんどない。しかし、劇作家として出発するにあたり執筆した歴史劇『ヘンリー六世』三部作では女性や庶民が活躍する歴史劇となっている。本論では『ヘンリー六世』第二部を取り上げ、庶民に焦点をあてることで歴史を動かす原動力としての人間の動機に着目していることを指摘する。ケイドの乱では、1381年の民衆暴動を織り込むことで、社会の仕組みに対する庶民の敏感な反応を描きだし、課税負担の問題をさらに大きな社会階層批判へと広げている。このように歴史劇における庶民の役割は王侯貴族の英雄物語にリアルな視点を投入し、歴史記述が重視する摂理主義や父権制の維持、世襲特権について挑むことだと考えられる。(査読有)
2.	『デジタル・アーカイヴズとエリザベス朝演劇』	共著	2015年12月 九州大学出版会 260頁	「市民が紡ぐ歴史劇 トマス・ヘイウッド作『わたしをご存じなければ、どなたもご存じない 第二部』135-156頁(岡本靖正、加藤行夫、英知明、佐野隆也、真部多真記、石橋敬太郎、西原幹子、辻照彦、勝山貴之、田中一隆) 概要: 1590年代の英国史劇は国王や貴族の英雄的行為を題材とし、チューダー朝成立までの歴史を描く一方で、市民的価値観は排除する。ところが1603年以降歴史劇をめぐる環境が変化し、歴史劇にも王侯貴族にかわる新たな歴史の担い手が登場する。本論では亡き女王のノスタルジアを背景として、ロンドン市民の価値観と経済力がイングランドの国家基盤形成に寄与したことを慈善行為をはじめとする様々な活躍を分析しながら考察する。(査読有)
(学位論文(欧文))				
1.	"Reality and Romantic Illusion: An Essay on <i>As You Like It</i> "	単著	1996年3月 津田塾大学大学院文学研究科修士号論文	『お気に召すまま』におけるmale bondingの形成と解消の過程に、女性が恋愛を通していかにかかわってくるのかを分析し、喜劇における男性の主体を悲劇の場合と比較しながら論じていく。
2.	"Political Application in Shakespeare's Drama: The Last Elizabethan Decade in <i>Henry V</i> and the Idea of Union in <i>King Lear</i> and <i>Cymbeline</i> "	単著	1997年10月 英国レディング大学大学院ルネサンス文学研究科修士号(MA)論文	エリザベス女王晩年期・1590年代のイングランドをめぐる政治状況を『ヘンリー五世』『リア王』『シンバリン』における国王表象を通して分析する。
(学術論文(欧文))				
1	"The King's Two Bodies in <i>Henry V</i> "	単著	1998年5月 『論集』第19号津田塾大学大学院英文学会発行 65-77. (総ページ数84)	「国王の二身体」という中世以来の政治概念を『ヘンリー五世』に援用して、国王権力の表象について論じていく。(査読有)

2	"Shakespeare's Views of a Hero in <i>Henry VI</i> "	単著	2002年4月	<i>Otsuka Review</i> Vol.38 大塚英文学会発行 1-27. (総ページ数82)	シェイクスピア最初の歴史劇『ヘンリー六世』三部作は、クリストファー・マーロウをはじめとする大学才人たちによって形成されてきた「タンバレン」型の英雄像を解体し、破滅していく王たちの内面を描くことによって、歴史劇＝英雄劇という従来の枠組みを独創的に壊している。本稿ではシェイクスピアの近代的主体の描き方を、英雄タルボットの死から自己の内面を強く意識するリチャード三世の誕生にいたる英雄像の変遷という観点から論じていく。(査読有)
3	"Past and Present:Representation of War in <i>Henry V</i> "	単著	2003年2月	『筑波イギリス文学』第8号 筑波イギリス文学会発行 1-21. (総ページ数74)	本稿では観客が知る現実と舞台が描く過去との差をいかにシェイクスピアが埋めていくのかを戦場の場面を分析することによって論じていく。(査読有)
4	"Shakespeare's Views of Kingship in <i>Richard II</i> "	単著	2006年3月	紀要『人間科学』第23巻第2号1-11	本稿ではリチャード二世とボリンブルックの国王観の違いを分析し、ボリンブルックの王位篡奪は決して赦されるものではないが、王権神授説とマキャベリズムがせめぎ合う時代に描かれた本作品は、リチャードの政治能力の欠如も十分に描かれていることを論じる。また、歴史劇は悲劇・喜劇に比べると観客を劇世界に動員しやすい。このことを踏まえて、本作品における観客と舞台との距離を考察し、シェイクスピアの国王観を論じる。(査読無)
5	"Prince Hal and his Notions of Kingship in <i>Henry IV, Parts One and Two</i> "	単著	2007年10月	紀要『人間科学』第25巻第1号47-54	王位篡奪という負の遺産を引き継いだハル王子がヘンリー四世にいたるまでの過程でマキャベリズムをいかに獲得し、新たな国王像を確立していくかをフォルスタッフとの関係性を分析しながら論じていく。(査読無)
6	"The Division of the Body Politic in <i>King Lear</i> "	単著	2008年3月	紀要『人間科学』第25巻第2号29-39	本稿では、リアが経験する王国分断とその後の悲劇的結末は、ジェームズ国王によるユニオン構想の破綻を表象していると考え。とくに王国分断を国王身体からの分断と重ね合わせていることに着目し、当時のほかの作家たちとは異なる視点で、ユニオン構想を捉えていたシェイクスピアの劇作術を分析する。(査読無)
7	Edgar's Role in <i>King Lear</i>	単著	2009年3月	紀要『人間科学』第26巻第2号 Pp15-30	『リア王』におけるエドガーの変容に焦点をあてて、本作品における悲劇の有り様をリアだけでなく、エドガーから論じていく。とくに、「浮浪者トム」にこめられた歴史的記号の意味を考察し、「トム」と「エドガー」の二つの身体から照射される悲劇の世界を論じていく。(査読無)
8	"War and Peace in <i>The Whore of Babylon</i> "	単著	2016年11月	<i>The Tsuda Review</i> Vol. 61, 63-79. (総ページ数110) 津田塾大学発行。	1605年の火薬陰謀事件後に上演されたとされる本作品の五幕六場に登場する戦場の赤子と最終場のバビロンの女帝の終わりなき好戦的態度の意味を1607年当時のPrince Henry Cultとの関係およびジェームズ1世の平和外交政策への批判を通して考察する。(査読有)
9	"John Foxe's Oldcastle Controversy: <i>Acts and Monuments</i> "	単著	2018年12月	<i>The Tsuda Review</i> Vol. 63, 51-62. (総ページ数92) 津田塾大学発行。	本論ではプロテスタント殉教者と国王への反逆者という複雑な歴史的評価を持つOldcastleの表象を取り上げ、17世紀以降のオールドカスル表象に影響を与えたジョン・フォックスのオールドカスルへの評価について分析し、この殉教者にこめられたフォックスの宗教的思想を考察する。(査読有)
10	"Many Charitable People: Representation of the Commoners in Thomas Heywood's <i>If You Know Not Me, You Know Nobody, Part Two</i> "	単著	2019年10月	紀要『人間科学』第35巻第1号	本作品における庶民が近代英国の歴史を形作る過程をチャリティ活動による社会参加という観点から考察する。(査読無)

11	"Truth Loves Open Dealing": The Truth of the Henrican Reformation in King Henry VIII"	単著	2020年12月	<i>The Tsuda Review</i> Vol. 65, 59-78. (総ページ数 84) 津田塾大学発行。	本劇が上演された1612-13年は、国王ジェイムズ1世のもとでイングランドの宗教的アイデンティティが問われている時期であった。そもそも宗教改革の原因をつくったのはヘンリー八世であり、彼の離婚問題に焦点をあてた『ヘンリー八世』をシェイクスピアは最後の歴史劇として執筆する。本稿では、シェイクスピアが1590年代に書き続けた王権表象との比較をしながら、本劇における王権のあり方について考察し、副題の"All is True"の意味を再考する。(査読有)
12	"I know my life so even": Katherine of Aragon in King Henry VIII and Griselda's Story"	単著	2021年12月刊行予定。(現在印刷中)	<i>The Tsuda Review</i> Vol. 66, 33-49. (総ページ数 75) 津田塾大学発行。	貞女グリゼルダの物語はボッカチオによって物語の原型をなした後、ペトルルカ、チョーサーを経てイギリス文学に受容される。興味深いのは、ヘンリー八世の最初の妻で、ヘンリーとの離婚問題がシスマへと発展するキャサリン妃の表象が、しばしばバラッドやナラティブのなかでグリゼルダにたとえられていることである。多くの場合、キャサリン妃の忍耐と一貫性にグリゼルダとの共通点を見出す。本稿では『ヘンリー八世』では、その特徴が男性社会を揺るがす資質であることを論じる。(査読有)
(学術論文 (和文))					
1.	「『シンベリン』における国家意識の表象について」	単著	1998年11月	『筑波イギリス文学』第4号 筑波イギリス文学会発行 48-61	『シンベリン』は"Stuart Cymbeline"と呼ばれるほど、ブリテン創建の神話を題材にした王国再生を描いた作品である。本稿では、作品に見られる国家表象を、ジェイムズ1世が利用したブリテン神話と国家建設のモチーフとの比較を通して、従来「問題劇」としてジャンル分けされている本作品をブリテン誕生を描いた歴史劇として読み直す。また、1590年代のシェイクスピアの歴史劇はチューダー朝創設までの歴史を描いており、これらとの違いも論じていく。(査読有)
2.	「抵抗する声：『ヘンリー五世』試論」	単著	1999年4月	<i>Otsuka Review</i> Vol. 35 大塚英文学会発行 32-48 (総ページ数70)	本作品における多層的・多重的な声の存在の意義を分析する。(査読有)
3.	「『シンベリン』におけるローマをめぐる」	単著	1999年12月	『筑波イギリス文学』第5号 筑波イギリス文学会発行 51-70. (総ページ数 78)	本稿では、国家と女性身体の問題を『シンベリン』におけるイモーゼンの身体表象を分析しながら論じていく。女性身体は、家長制度を維持しつつ、同時に転覆の可能性を秘めている。敬愛と脅威の両義性を持ち合わせたイモーゼンの身体が、ポスチュマスとヤーキモ、すなわちブリテンとローマの二人の男性間にどのような影響を与えるのか、そして女性身体がいかに家長制度のなかに再びとりこまれるのかを論じる。(査読有)
4.	「新しい君主と『リチャード三世』」	単著	2010年2月22日	『筑波イギリス文学』第15号、筑波イギリス文学会発行 1-16 . (総ページ数 92)	『リチャード三世』における君主のあり方をマキャヴェッリの君主像との比較によって考察する。マキャヴェッリの君主思想は暴君を連想させるマキャヴェリアンに終始しがちであるが、マキャヴェッリの君主思想あるいは政治思想は古典古代からの伝統的な思想を尊重したものが多く。本論ではこの点に着目して、シェイクスピアが伝説的悪党リチャードを描くにあたり、あらたな君主像としてマキャヴェッリと彼が基盤とした古典思想をいかに投入したかを検証する。(査読有)
(書評)					
1.	Chris Fitter ed. <i>Shakespeare and the Politics of Commoners: Digesting the New Social History.</i>	単著	2019年3月	<i>Shakespeare Studies</i> , Vol. 57, 37-39. (総ページ数53)	Chris Fitter ed. Shakespeare and the Politics of Commoners: Digesting the New Social Historyの解題と評価をおこなう。(査読有)
(報告書・会報等)					

1.	16-17世紀の英文学・歴史テキストにみられる近代の表象について	単著	2005年10月	紀要『人間科学』第23巻第1号114頁	シェイクスピアの『リチャード二世』とベン・ジョンソンのローマ古典悲劇『セジェイナス』と『キャティライン』を取り上げ、作品をめぐる当時の政治・文化状況、とりわけエセックス伯の政治・文芸サークルの動きを視野におき、中世的価値観の崩壊と近代国家形成の萌芽を読み解く。
2.	16-17世紀の英文学・歴史テキストにみられる近代の表象について	単著	2006年10月	紀要『人間科学』第24巻第1号55頁	シェイクスピアの『ヘンリー四世』二部作とフィリップ・マッシンジャーの『ローマン・アクター』を取り上げた。前者については、フォルスタッフをハルにとつての「母性を象徴する身体」としてとらえ、終幕でのフォルスタッフの拒絶は男性主体の家父長制をもとにした家族＝国家のあらたな創造と、国家の「家長」としてのヘンリー五世の誕生として読む。また、タキトウスの伝統を汲むといわれる『ローマン・アクター』であるが、マッシンジャーがタキトウスに見たものはRoman virtueの擁護とfreedomの復活であり、絶対王政下で無条件に服従を強いられる当時の臣民の様子であることを指摘した。
3.	16-17世紀の英文学・歴史テキストにみられる近代の表象について	単著	2007年10月	紀要『人間科学』第25巻第1号80頁	シェイクスピアの歴史劇における国家、権力、ジェンダーの問題を、Henriadに登場するモーター一家の女性たちに焦点をあてて分析した。「歴史」というナラティブは男性主体の国家観を描いていくが、そのなかでも女性身体のしたたかさは排除しきれない。そのことはエリザベス女王下のイングランド国民には十分理解されていたと思われる。そしてシェイクスピアもまた強烈な個性と魔性を持った女性像を描くことによって、エリザベス女王の強さと政治能力をしたたかに主張していると指摘した。
4.	「国語科授業の各学年週1時間増加を伴う水戸市幼・小・中英会話教育特区研究における英語教科化の可能性の探求」	分担執筆	2007年10月	紀要『人間科学』第24巻第1号48頁	小学校の英語教育の場合、英語担当教員とALTの連携は欠かせない。ALTが補助的に授業に参加する場合と、ALTが日本人教員と連携して主体的に授業に参加する場合では、児童が生英語に触れる機会がかなり異なってくるため、ALTの発話量を増やし、発話内容も豊かなものになるように、授業構成していくことが大切であることを指摘した。
5.	「国語科授業の各学年週1時間増加を伴う水戸市幼・小・中英会話教育特区研究における英語教科化の可能性の探求」	分担執筆	2007年10月	紀要『人間科学』第25巻第1号73頁	小学校の英語教育における「書く」指導は、児童の知的好奇心にあわせて無理なく導入することが必要とされる。英語を書くためには、語彙を覚えるというステップが必要なため、語彙の量やその語があらわれるコンテキストを考慮しないと、暗記が中心となってしまう、かえってコミュニケーション重視の英語教育の展開を阻む結果になりかねないからだ。大阪市の小学校では「書く」だけの作業ではなく、音声による指導と連動させ、児童が無理なく学習できるシステムの構築がみられた。
6.	「英作文教育におけるアクティブ・ラーニング活用の実践報告」	分担執筆	2017年12月	『津田塾大学紀要』特別号I、359-396、津田塾大学発行。	英作文教育におけるアクティブラーニングの授業実践について報告した。
(国内学会発表)					
1.	セミナー「ロマンス劇を読むーCymbelineとThe Winter's Taleを中心に」において、「『シンベリン』：王国再建におけるイモージェンの機能について」と題して発表。		1999年10月24日	第38回シェイクスピア学会（於：岩手大学教育学部）	「ロマンス劇」は女性身体に着目した作品が多い。本発表では王国再建におけるイモージェンの身体の意義を考察した。
2.	「シェイクスピア喜劇におけるローマ受容」		2001年2月24日	地中海学会研究例会（於上智大学）	シェイクスピアが喜劇においていかにローマを受容していったのかを『間違いの喜劇』を題材にして発表した。

3.	「ヘンリー四世における君主のあり方—neciessitaを切り口にして」		2011年1月19日	Elizabeth朝研究例会（於慶応大学）	ヘンリー四世で表象される君主像について、neciessita（必然性）の特性を切り口にして考察し、マキャヴェッリが展開した君主像との関連を検証する。
4.	セミナー「ヘンリー六世三部作を読む」において、「『ヘンリー六世第二部』における庶民について」と題して発表。		2012年10月14日	第51回シェイクスピア学会（於：秋田大学）	「ヘンリー六世」三部作は摂理主義や父権制の維持を主張する歴史記述に対し、女性や庶民に着目することで歴史劇の可能性を模索している。本発表では第二部におけるケイド等庶民の表象をとおして、シェイクスピアが探った歴史劇の可能性について考察した。
5.	「『私をご存じなければどなたもご存じない』にみられる新しい勝利のかたち」		2013年5月11日	第12回エリザベス朝研究会（於 慶應義塾大学）	トマス・ヘイウッドの歴史劇『私をご存じなければどなたもご存じない』には市民の価値観がイングランドの歴史を紡いでいる様子を、萌芽しはじめた資本主義の発展という観点から考察した。
6.	「市民が紡ぐ歴史劇 トマス・ヘイウッド作 『私をご存じなければ、どなたもご存じない』第二部」		2013年10月5日	第52回シェイクスピア学会（於：鹿児島大学）	トマス・ヘイウッドの歴史劇『私をご存じなければどなたもご存じない』を市民の立場から描くイングランドの歴史劇としてとらえ、劇の中心となる市民による慈善行為とグレンシャムの王立取引所設立を中心に、劇作家の歴史意識を考慮しつつ考察していく。
7.	「トマス・デッカー作『バビロンの娼婦』(1605)とプロテスタントミリタリズム」		2014年6月7日	第16回Elizabeth朝研究例会（於 慶応大学）	トマス・デッカー作『バビロンの娼婦』はデッカー自身のプロテスタントミリタリズムが反映された作品として知られている。しかし、作品を精緻に読むと必ずしもタイタニアに好戦的なエリザベス像をみることはできない。すでに商業演劇界では『靴屋の休日』等喜劇において成功をおさめた作家が描こうとしたプロテスタントミリタリズムとはなにかを探る。
8.	「トマス・デッカーの歴史観『バビロンの娼婦』をめぐって」		2015年3月17日	第19回Elizabeth朝研究例会（於 慶応大学）	『バビロンの娼婦』五幕六場に登場する戦場の赤子と最終場のバビロンの女帝の終わりなき好戦的態度が意味することを、1607年当時のヘンリー王子カルトとの関係およびジェームス1世の平和外交政策への批判として考察した。
9.	「トマス・デッカー『バビロンの娼婦』とアルマダの記憶」		2015年10月10日	第54回シェイクスピア学会（於北海道教育大学）	『バビロンの娼婦』における好戦的な女王の態度とイングランドの対スペイン戦争について、当時の時代背景とともに考察する。
10.	「Perkin Warbeckにおける王権表象再考」		2016年5月21日	第24回Elizabeth朝研究例会（於 慶応大学）	Perkin Warbeckにおける王権表象について、スチュアート朝の政治戦略とともに考察した。
11.	「忘却の意味をめぐって—『ヘンリー四世』第一部」		2017年6月24日	第28回Elizabeth朝研究例会（於 慶応大学）	Henry VI, Part Iにおいて多様される remembering/forgettingの意味を分析し、作品における忘却の意味を考察した。
12.	Chris Fitter ed. <i>Shakespeare and the Politics of Commoners: Digesting the New Social History</i> を読む		2018年9月8日	第33回Elizabeth朝研究例会（於 慶応大学）	Chris Fitter ed. <i>Shakespeare and the Politics of Commoners: Digesting the New Social History</i> の解題と評価を行う。
13.	セミナー「初期シェイクスピアとその周辺」において、『ヘンリー六世』第二部における民衆暴動表象と題して発表。		2018年10月14日	第57回シェイクスピア学会（於津田塾大学）	Henry VI, Part IIにおける民衆暴動について、上演当時の外国人排斥運動と関連付けて論じた。

研 究 活 動 項 目

助成を受けた研究等の名称	代表, 分担等の別	種 類	採択年度	交付・受入元	交付・受入額	概 要
(科学研究費採択)						
1. デジタルアーカイヴズと英国初期近代演劇研究—劇場・役者・印刷所を繋ぐネットワーク研究	分担者	基盤研究B	2011年度	筑波大学	5,850,000	デジタルアーカイヴズを基にして、複合的な観点を基に歴史的資料を駆使して、演劇の本流に対する傍流の流れを考察していく。

2	デジタルアーカイブズと英国初期近代演劇研究－劇場・役者・印刷所を繋ぐネットワーク研究	分担者	研究成果公開促進費(学術図書)	2015年度	筑波大学	1,500,000	2011年度から4年間の科研費による研究成果を出版物として発表するにあたり、学術図書の出版というかたちをとった。その際、科研の研究成果公開促進費をいただくことができた。
3	「初期近代英国史劇の生成と発展－劇団・劇場・俳優のネットワークを中心に」	代表者	基盤研究C	2018年度	常磐大学	900,000	初期近代英国史劇の生成と発展について、デジタルアーカイブズを活用しながら、劇団と俳優のネットワークのなかに各作品を置きなおし、当時の政治・文化状況を考察しながらあらたな英国史劇の読みの可能性を探る。
(競争的研究助成費獲得(科研費除く))							
1.	なし						
(共同研究・受託研究受入れ)							
1.	なし						
(奨学・指定寄付金受入れ)							
1.	なし						
(学内課題研究(共同研究))							
1.	国語科授業の各学年週1時間増加を伴う水戸市幼・小・中英会話教育特区研究における英語教科化の可能性の探求	分担者		2005年度～2007年度			水戸市の小学校における英語授業を視察し、複数の視点から教科化にむけて提案・助言をおこなう。
(学内課題研究(各個研究))							
1.	16-17世紀の英文学・歴史テキストにみられる近代の表象について	代表者		2004年度～2006年度		750000円	初期近代の歴史および英文学テキストから近代的主体形成および国家形成の過程を読み解く。
(知的財産(特許・実用新案等))							
1.	なし						